

新島遺品庫より

— collection 4 —

新島家旧蔵洋食器



新島襄の好物と聞けば、そばや汁粉が思いつくかもしれない。徳富猪一郎と木曾路を旅したときにはそばの賭け食いをし、友人との別れ、そして再会したときには汁粉で乾杯したなど、それぞれにエピソードが残る。ただし、新島家に招かれた学生たちの回顧の中では、洋食をご馳走になったという回顧がたびたび登場する。その新島家の食卓の様子を今に伝える資料が、新島家で使われていたこの洋食器である。

1888年（明治21）に同志社を卒業した湯浅一郎は生徒の時代に新島家に招かれた時のことを次のように回顧している。

新島先生の家には、帰省する時、又は正月に呼ばれて西洋料理を馳走になったが、キャベージマキ、オムレツ、ピフテキ等の様な、今日では余り結構でないものを悦んで食べた。チーズ（注チーズ）は不味いものだと思つて食べなかつたら、是が西洋料理を食べる時は必ず食べなければなら無いものだと先生から云われた。（『創設期の同志社』同志社社史資料室1986年99頁）

湯浅以前の生徒の回顧にも新島家、あるいは外国人教員宅で洋食を食した、もしくは、外国人教員をはじめ仲間と共に外食で洋食を食べに行ったことなどが登場する。頻度

は多くはないとはいえ、当時の学生にとつて洋食は決して遠い存在ではなかった。

また新島が食肉や乳製品を奨励していたことも湯浅の回顧から窺われる。同様に学校の創立者で明治初期に肉食を奨励する文章を残した人物がいる。福沢諭吉である。

福沢の論説の中に1870年（明治3）に書いた「肉食之説」という文章がある。肉食、もしくは穀物などを中心とした菜食のどちらか一方に隔たらずバランス良く食事をとることが心身ともに闊達なる人物の育成につながるという論である。今日では洋食の導入以降日本人が体格的に発達したことは明らかではあるが、明治初期、食肉がタブー視されがちであつた時代にあつて、その肉食の重要性を見出した背景には福沢の外国体験がある。襄も周知の通り10年ばかり海外での生活を経験し、洋食の効用等を実感していたはずである。この意味では、襄は同志社で学問を、キリスト教で精神を、食事等で肉体を鍛えるということも考えていたかもしれない。この洋食器は、襄と八重の、京都において先進的であつた洋風生活のあり様だけでなく、生徒たちに対する襄の食への考え方や教育理念などにも示唆を与える資料かもしれない。

（同志社社史資料センター）